

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—試行錯誤—
No.36



緊急時には民間の医療施設が人々の頼り。JVCが支援したアームルの救急センター

激動するレバノン

戦禍にあえぐ人々と共に

竹内 俊之

I. 再びベイルートへ

8月のダマスカス（シリア）の昼下がりには焼けつくような太陽の熱光が容赦なく降りそそぎ、重いトラックをひきずってバスでダマスカス市内に入り、安宿にチェックインをすませた時分にはもうすっかり砂漠の空気につつまれているような気持ちになった。1月（1983年）に来た時もやっかいになった安宿のフロント係をしているパレスチナ人のおじさんは、私の事を憶えていてくれておおげさなジェスチャーをまじえ歓迎してくれた。これからベイルートに行く途中だと言ったら、またかというように肩をすぼめてみせた。

ダマスカスの明るさとはうらはらにレバノンでの

状態は様々な条件が重なりあって悪い方向に進んでいた。レバノン政府、キリスト教右派とイスラム教左派との緊張関係、ベカー高原におけるPLOの内紛の激化、トリポリでの親シリア派民兵と反シリア派民兵の対立等々…。

初めベイルートへはアテネから空路を利用する予定でいた。ところが、8月10日にベイルート空港は砲撃にあって閉鎖されてしまった。ダマスカスから陸路でベイルートに入ることができたのは、シリアで“テル・デ・ゾム”という主に身体に障害を持つ子供達の自立を援助する団体を創設した、ポール神父のおかげだった。彼は月に一回そういった子供達を

Trial & Error 36号 目次

- スラムの未来は子供たちの教育から……………8 p
- 声・アフリカ 募金者のおたより紹介……………11 p

治療の為レバノンの病院までつれていくという。10日はその月に一回のレバノン行きの日だ。ダマスカスの旧市街の東の門、バプトゥーマ門に朝の8時に行くと既に子供達を乗せたバスが待っていた。緑の少ない岩はだが露出した山を両側に見ながらほりっぽい空気の中をかなりのスピードでバスは走っていった。道はかなり広いアスファルト舗装路から国境が近づくにつれて一車線に変わっていく。シリアの出入国管理事務所です手続きをとり、さらに車で10分程走った坂の終りのところにレバノンの管理事務所がある。ポール神父達は一括して手続きをやってもらっているが、私は根掘り葉掘り質問にあう。押し問答の末ついに入国。

レバノンに入るとがらりと感じがかわった。道路ぞいの建物も戦闘の被害を受けてか破損が目だつ。一見して民間人のような人々が肩から自動小銃をかけて街を歩いている。バスはベカー高原の町シュトゥウラに入ってベイルート=ダマスカスハイウェイを左にそって、とある修道院の敷地の中に入り停車した。バスはここから引き返す。あとは他の車が来る事になっているという。その日の午前中も街中で戦闘があったということで出迎えてくれた神父も緊張していた。しばらくするとサイレンを鳴しながらレバノン赤十字の救急車が三台敷地の中に入って停った。三台に分乗した一行は戦闘地帯を避ける為

北上し、ザハレにぬけ山間部の村と村を結ぶ細い道を一路ベイルート目ざして進んでいた。結局ベイルートに入ったのは次の日(11日)の夜になってからであった。

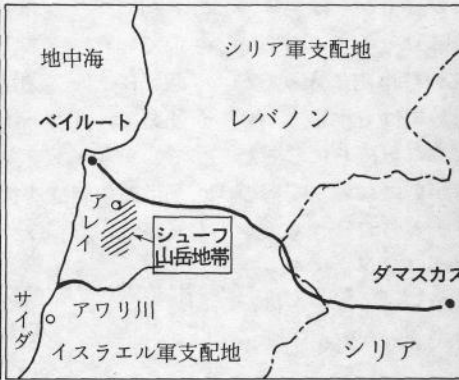
II. レバノン、逃げまどう人々の生活

約半年ぶりのベイルートは変わらぬ喧噪の中にありながらもピリピリとした緊迫感が伝わって来た。7月23日には、反ジェマイエル政権という事で一致したPSP(進歩社会主義者党)のワリード=ジュブラッドと、1975年内戦当時の大統領と首相であったスレイマーン=ファランジーエ(キリスト教マロン派)と、ラシード=カラミ(イスラム教スンニ派)の三者が救国戦線を結成して、ベカー高原や中部山岳地帯で、政府軍あるいはキリスト教右派民兵と衝突をつづけていた。またイスラム教シーア派の政治組織アマルの民兵も共同戦線を張ることが多かった。

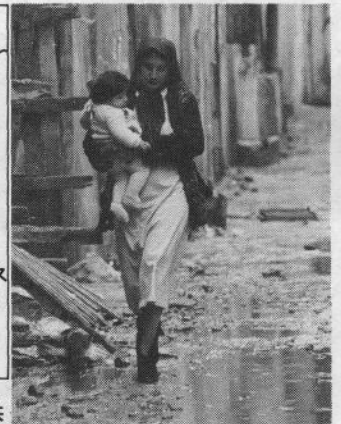
避難民の流入で悪化するベイルートの住宅事情

他のレバノン国内の主要都市と同様、ベイルート市内にも武力衝突が頻繁に発生する山間部等からの避難民が流入して来ている。その事もあって都市部の土地・不動産の価格は上昇し、それに従い住宅事情も著しく悪化していた。富裕な人々は日本人の生活水準をかなり上まわった住居に暮すが、多くの人々は一部屋に家族で住むか独身者でも兄弟、親戚、友人等の同居人が最低一人は必ずいるというぐあいである。ようやく借りることができた私の部屋もかなりお粗末な方だったが、すぐ向いの部屋にはトリポリから避難して来た三姉妹が一部屋で生活していた。レバノンでの最低賃金は1,100レバノンポンド(約4万7千円)だが、私が借りたところで一ヶ月1,300ポンド(約5万5千円)だった。

注：テルデゾムはもともとスイス国籍のフランス人、エドモンド=カイセル氏によって、1960年スイスのローザンヌに設立された社会福祉団体である。主に困難な状況にある子供達に働きかけている。スイス、フランス、オーストリアにそれぞれにテルデゾムがあり連携しあって活動している。中東地区では、シリアのダマスカス在住のポール神父によって始められた運動が、テルデゾムの支援を受け、後にテルデゾムシリアとなった。レバノンのテルデゾムも同じ経緯で成立した。



シャティーラ キャンプ UNRWA 提供



人々の質素な食卓

このような人々の日々の食事は実に質素だ。ホブスというアラブ特有の円型のかたいうすっぺらいパンを主食として、ホモスと言われる豆をすりつぶしてオリーブ油とまぜペースト状にしたものとか、ナスをつぶしてペースト状にしたものなどを、パンをまるめスプーンがわりにしてすくい上げ、上手に食べる。オリーブの実、チーズ、トマトとキュウリのサラダも欠かせないおかずだ。豆、トマト、じゃがいも、羊の肉等の煮込み料理も一般的であるが、他のアラブ人と同様豚肉は食べない。

情報に敏感な市民たち

レバノンという国自体いっどこで戦闘行為が起きても不思議ではない状況にある。そこで暮らす人々は常に最新の情報をつかもうと努力している。そうすることが自らの安全を確保する為に必要であることを充分承知しているのだ。軒下に椅子を持ち出し新聞を読む老人、街角で立ち止まり携帯ラジオに聞き入る紳士。日々かわす挨拶においてもどこで何が起った、または何が起きそうだという噂の類まで非常な真剣さで話し合われる。私が借りていた部屋の大家はスンニ派イスラム教徒のおばあさんだが、読み書きのできない彼女は一日中ラジオをつけ放しにして、常に外で何が起きているかを神経質に思える程の熱心さで知ろうと努めていた。ラジオのアラビア語を解さない私は裏通りの奥にある私の部屋から表通りに出て、初めてその異常な人通り少なさに気付き、何か起きているということを知るといっても少なくなかった。

Ⅲ. また戦闘が始まった

8月28日に、ベイルート南部効外スラム地域のアマルの民兵と政府軍のこぜりあいから始まった戦闘は、西ベイルートの砲撃をも伴う大規模な市街戦へと発展した。一時は西ベイルート全域に展開したアマルの民兵は、それにつづく政府軍の約一万の兵を投入した反撃によって南部スラム地域に押しもどされた。したたかな戦時下の市民生活

その間無期限の外出禁止令が出されていたのは言うまでもないが、激しい砲撃の中、人々は地下室にカンヅメ状態になる。1982年のイスラエル軍による西ベイルート包囲を例に出すまでもなく、ベイルート市民は度々このような経験をしているのだが、その度に指摘されるのは彼らのしたたかさである。今回も戦闘の合間をぬって商店が開き食料品を売りさばき、また買う方も外出禁止令にもかかわらず出



ベイルート、シャティエラ UNRWA 提供

かけて行く。兵隊の方でも別に気に留めるわけでもない。およそ10年近くの間戦闘がつづいている国の市民の生活の智慧というところだろうか。

山岳地帯からの避難民に、救援活動、動き出す

昼間の時間帯の外出禁止が解けて間もなく、9月3日～4日にかけて今度はイスラエル軍がそれまで占領していたシューフ山岳地帯から約30km南方のアワリ川以南に部分撤収した。元来キリスト教徒とドルーズ派イスラム教徒の村々が混在していたこの地域に、突然、軍事的空白地帯が現われたため域内の支配権をめぐる内戦が本格化した。両派に近い報道機関からは、山岳地帯で孤立した各宗派村落で住民の虐殺事件が伝えられた。シューフ山岳地帯に住んでいた両派住民約14万人が、国内で難民となってベイルート、サイダ、チール等の近隣の都市に流出した。キリスト教やドルーズ派のコミュニティ（共同体）がただちに救援活動を始めたのはもちろんのこと、9月5日にレバノン政府が出したアピールに応える形で、16日までに計50万ドルの物資が国連事務総長の基金から送られた。また緊急のニーズに対応するため、通常の国連連絡委員会を、ICRC（赤十字国際委員会）等の国際機関や、MECC（中東キリスト教協議会）、SCF（Save the Children Fund）、CRS（カソリック救済事業団）、OXFAM等の民間団体も含むものに改編して救援活動にあたった。実際のところプログラムの実施段階では各コミュニティのレバノン人のボランティア活動家が一番貢献したようだ。的確にニーズを把握している彼らは国際機関から送られる物資を効率的に配布することができる。

人口120万人といわれるベイルート首都圏において約半数を占めるといふスラム地区の住民は、少なからず以上のような経緯で戦場から逃れ、流れつき、社会のおりとなって滞留しているのである。

IV. レバノンの民間団体の活動

医療など公共のサービスが欠如しているスラム地区

先に触れたようにレバノン特にベイルートにおけるスラム化は、単なる経済問題が国内の武力衝突等の政情不安によってより促進されるという形態をとっている。

1975～76年の内戦では東ベイルートのパレスチナ難民やスラム住民が、西ベイルートあるいは南部郊外のスラム地域や難民キャンプに移住せざるを得なかった。地中海に面した西ベイルートのジナー地区は、かつては、富裕階級の人々のプライベートビーチとして栄えていた所だが、今では海岸線にそってスラムが形成されている。ベイルートに限らずレバノンではシーア派イスラム教徒やパレスチナ難民、クルド人、その他周辺諸国からの移民が社会の底辺層をなしている。こうした人々は、それぞれのコミュニティに属して生活している。ここでは、政府がやるべき福利厚生面における公共サービスはほとんど存在していない。ベイルート首都圏の人口のおよそ半数にあたる人々が生活している南部のスラム地帯で、公立の病院はもとより私立の病院もひとつだけである。あとは民間の福祉団体、ボランティア団体の運営するクリニック等が限られた財源で運営されているにすぎない。JVCがカウンターパートとして提携しているアームルもそのような団体のひとつだ。

抑圧された人々に連帯するアームルの活動

本誌26号で触れたように、アームルは1978年に設立されたレバノンの市民を中心とした地域開発団体である。彼らが自己の活動を規定する時に好んで使うThe Lebanese Association For Popular Action (大衆行動の為のレバノン協会)という肩書きにも表わされているように、彼らの活動はボランティア活動というより「運動」ととらえた方が適切なのかも知れない。もともとボランティア自体自らの主体性が大きな比重を占める以上、そこに状況に対する共通の認識と変革を求める指向性が確認されていれば、それは根源的な意味では「運動」と何ら変わるところはない。彼らは貧者、もっと直截に言ってしまうと「抑圧された人々への連帯」をその組織の綱領のひとつに掲げている。

活動に実際に参加しているスタッフ、ボランティアが出ている宗派コミュニティは様々だが、対象にしているのが最も貧しい人々となれば、必然的に最下層のシーア派イスラム教徒ならびに移民労働者、



シーアの救急センターに負傷者を運ぶ民間防衛隊員

UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) のサービスを受けられない認定外パレスチナ難民等が多くなっている。したがって活動地もチール、サイダならびにその周辺の村々、ベイルートでの貧民街(南部郊外に広がるスラム地域等)、ベカー高原の町バルベクとその周辺の村々に集中している。

アームルの緊急時の救援体制

通常は以上のような現場で診療所、職業訓練、識字教育、幼稚園、衛生教育等の活動を行なっているのだが、8月末の西ベイルート市街戦から日常的になったスラム地区での戦闘状態に対処するため、ベイルートでの活動は緊急プログラムへと変更されていった。まず今までアームルが活動の拠点として来た診療所、職業訓練センター等は、緊急救援センターとして最悪の事態に対応すべく体勢の立て直しが始められた。それまであった機能に加えて傷病者の搬送、第一次救急処置を保証するためのCivil Defence Team (民間防衛隊、日本の消防庁の救急隊にあたるが隊員はボランティア)の強化、ボランティア医師・看護婦の再編成、設備の充実が計られた。さらに戦闘時にスラム地域が外部との交通を遮断された場合の、第二次救急施設にあたる緊急救援センターを臨時に設立した。

ベイルート市内の南サブラ、シャティーラ両パレスチナ難民キャンプに隣接したシーヤ地区にある公立の女学校の1階の一部と地下室を借用して設立されたシーヤ・エマージェンシー・センター(救急センター)は、通常は1階に設けられた処置室で他のセンターと同様簡易クリニックの役割を果たしているのだが、必要な時には以下の機能が稼動可能となる: ベット60床、手術室、薬局、処置室、検査室、レントゲン室、救急車2台(それぞれに民間防衛隊3名)。フランスの医療ボランティア団体MSF(国境

なき医療団)は、8月に状況が悪化し始めた時点でコーディネーター(調整員)を送り込み、このセンター設立に協力し、有時の際に彼らの派遣チームがすみやかに任務を全うできるよう手配していた。実際彼らは約6ヶ月間に2度にわたってチーム(コーディネーター、外科医、麻酔科医、看護婦)を送り込んで来た。

JVCはこのエマージェンシーセンターの設立に協力するためアームルに対し医療材料、機器、毛布等の送付と資金供与を行なった。

アームルはこの他にも西バイルートに流入して来た難民の居住区に、医療ボランティアを定期的に派遣して医療サービスを提供している。

キリスト教徒難民と、テルデゾムの活動

9月のシューフ、アレイ山岳地帯での戦闘では、多くのキリスト教徒も、難民となって逃げまどうことになった。同地方の、キリスト教徒とイスラム教徒ドルーズ派の人々が混じって住んでいる地区から、約2万人のキリスト教徒が、キリスト教徒の要衝、デールエルカマルに流入した。彼らはその後3ヶ月間、ドルーズ派民兵に包囲され、ICRCの物資配布によって生き延びた。12月中旬、包囲が解かれ、これらのキリスト教徒は、イスラエル軍とICRCによって東バイルートまで移送された。

レバノンのテルデゾムは、レバノン赤十字と協力して難民(主にキリスト教徒)の救済活動を行っている。JVCは'84年2月に、彼らに救援物資として毛布500枚を空輸した。

V. パレスチナ難民のおかれていた 厳しい状況

ここで、レバノンに40万から50万人いると推定されるパレスチナ難民に焦点をあててみたい。

前回の調査報告(本誌26号)でもふれたように、レバノンのパレスチナ難民にとって、安全の確保は大きな問題となっている。'82年9月のような事件(サブラ、シャティエラでの虐殺)や突発的な戦闘行為がふたたび起きないとは誰も断言できない。事実'83年の12月、クリスマスにかけてまたしてもサブラ、シャティエラを舞台にして争われたレバノン政府軍とシア派イスラム教徒民兵との戦闘はパレスチナ難民の中にも多くの被害を与えた。

またUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)のサービスが受けられるのは1948年に登録された難民とその扶養家族に限られている。しかし西岸、ガ



ブルジバラジネ、パレスチナ難民の一家

ザ、レバノン、シリア、ヨルダンで登録されている総数は約260万人にすぎず、この数は400万人以上存在すると言われるパレスチナ人全体のおよそ半数でしかない。

彼らのうちで特に貧しい、未亡人、孤児、老人等は特別困窮難民というカテゴリーの中で食糧(小麦粉、米、砂糖、食用油)の配給、毛布や中古衣類の支給、小額の現金給付、家屋の修理援助、職業訓練や教員養成計画への優先的入学などの援助を受けられる点は評価できる。

9月初めに始まったシューフ、アレイ戦争の最中に、シャティエラキャンプのUNRWAが運営するクリニックを訪れた。そこの医師、フート氏は、日本人がパレスチナ難民に何らかのかかわりをもってくれるのは大変喜ばしいことだと前置きしながら、次のように語ってくれた「私達は30年以上も難民としてレバノンに住んでいる。そしてとかく批判はあるが、国連の決議にもとづき設置されたUNRWAがある。最後にたのみとするものがある。しかし今レバノン人には何もない。助けを必要としているのは、困窮し、みじめな状態にあるレバノンの人々だ。彼らには、最後に助けてくれる何ものもない……。」

しかしながら、レバノンでの一般的社会状況はまだまだ彼らにとって不利な状態だ。レバノン人の間に長い時間かけてつちかわれた差別意識、もめごととかかわりを避けたいという潜在意識が、パレスチナ難民の社会的立場を弱いものとしている。また政府レベルでの対応も実情に即していない。1982年12月18日の現地紙アンナハルに掲載された労働省の決定、「レバノン人に限られる事業・職業と、外国人が行ないうる事業・職業」の中で、外国人が就くことのできる職業は、農業労働者、皮革加工者、建設工事労働者、じゅうたん織工、コック等々約10の職種に限定されている。ここではパレスチナ難民は外国人に含まれている。

パレスチナ人の婦人達のための主体的な活動

以上あげたようなパレスチナ難民のおかれている状況の特殊性ゆえに、パレスチナ人を対象にした福祉・医療・教育分野での活動は、海外から支えられている部分が多い。

パレスチナ人自身による活動は、'82年夏のPLOのベイルート撤退後、難かしくなっている。そのなかで、アソシエーション・ナジデは主体的な活動を続けている。ナジデは、レバノン人による、レバノンとパレスチナの婦人のための団体として説明されるが、実質的にはその多くの活動がパレスチナ難民に集中している。今レバノンで、レバノン人がパレスチナ人の問題にかかわる事は大変危険な事だ。ナジデのメンバーも、2度爆弾テロにあっている。

ナジデの活動資金はかなりの割合をフランス、スイスなどヨーロッパの民間団体から得ている。しかしプロジェクト立案、執行等における主体性はすべて彼らによって確保されている。活動は4つの部門に分かれる。ハンディクラフトの生産販売、未就学児童の教育、職業訓練、生活指導、ソーシャルワーカーの派遣である。なかでもハンディクラフトの生産・販売は、多くのパレスチナ人の婦人達の生活を助けている。サイダ、チール周辺の難民キャンプでは各々120名～130名、ベイルートのシャティーラでは40名程の難民の婦人達が、パレスチナの伝統的な模様のししゅうを一針一針あげることによって生活費の一部を確保している。

他には、ノルウェー人民救済協会がサブラ キャンプのはずれで婦人に対する職業訓練、識字教育のプログラムを行っていた。サブラ地区のパレスチナ婦人同盟がイニシアティブを取って精力的に活動している。

シャティーラのはずれではオーストリア政府の派遣している医療チームが、診療所、託児所と婦人の職業訓練の場を兼ねた複合施設を運営している。チームといっても医師2人、看護婦1人の小さなものだが、ボランティアとして来た彼らはパレスチナ人ワーカーの人事管理から会計にいたるまですべて自分達でやるという。

VI. 日本の団体としてのJVCの今後のとりくみ

レバノンでのJVCプロジェクトの現状

レバノンの戦争被災民（レバノン人、パレスチナ人）への医療援助として、現地のボランティア団体

へJVCが医療ボランティアを派遣するという、今回の計画は、'83年8月、9月の戦闘による状況の悪化のため延期された。新たな難民の発生に対応して、必要とされた毛布等の救援物資を送ることができたものの、ボランティアの派遣は、政情の不安定さを反映してか、レバノン政府からビザが発給されないまま実現できていない。今後は'84年4月末までをメドに、レバノン国内の状況を追いつつ、レバノン当局と折衝していく予定。

JVCにとっての、このプロジェクトの位置づけ

JVCの組織としての目的は、「難民及びそれと同様に恵まれない境遇にある人々に対する援助を行う」ことになっている。現実には、JVCはその設立の過程を反映して、活動の多くが難民を対象としている。

この種の活動は、状況に応じていくつかの段階に分けることができる。①生命の危険にさらされた人々への緊急救援活動、②以前の状態へ戻す、復興(リハビリテーション)活動、③地域開発による社会全体の適正な発展をめざす活動である。

JVCの今までの活動は全体として、本来の緊急状態の対応を除外したうえでの広義の緊急救援から開発の部門にまでまがっている。しかし発足当時から緊急事態に即応できる実力を獲得していく事を常に考えて来た。

JVCはそのひとつの目標を医療面での緊急救援活動においている。'82年末より開始されたタイ=カンボジア国境のレントゲン移動診療プロジェクトや今回のレバノンでの試みもその目標に到達する為のアプローチのひとつととらえている。

緊急時の医療に力を発揮できる民間団体

緊急時の医療活動では、ICRCや各国赤十字と協力して必要な活動を行なう、民間のボランティア団体が重要な役割をはたしている。政府ベースでの活動では、まず医師、看護婦等の医療ボランティアのリクルートの難しさがある。さらに危険地域に赴くため安全に対する保障の問題が大きい。あるいは被災者が発生する地域の微妙な政治性等のため、制約が多い。これに対し民間の活動は、資金的に限界はあるが、意識の高い医療人が、自己の責任において自発的に参加しているため、この点を克服できる。

緊急時における医療活動で民間の草わけの存在は、フランスの国境なき医療団(M S F)である。

紛争地帯において、党派の政治性を越えて民間人に対する医療の必要を満たすことのみを考え、一番



学校を利用したキリスト教徒の一時避難所にて

必要とされているところへ行き活動し、必要がなくなればすみやかに撤退する。—このような活動の形態を仮にMSF型救援活動と呼ぶことにする。日本のボランティア団体であるJVCが、MSF型救援活動をめざす場合、どのようなアプローチが必要だろうか。

私たちがとりくむべきこと

まず一般的に日本人が持っている、言葉のハンディと他の社会・文化を理解する受容力の低さ等、国際感覚の未発達というネガティブな面もこうした活動をしていくにあたって克服されなくてはいけない。長期的には欧米のこういった分野でのNGO'Sの経験を学び、ノウハウを蓄積していくのと同時に、語学を初めとして地域の研究も進めていかななくてはならない。

次に、プロジェクト立案にあたって留意すべき問題をあげてみたい。まず、日本の医師・看護婦等の医療ボランティアの、現場の状況への適応力の問題がある。活動地で起こっていることに関する知識を、派遣前に得ることが必要なことは言うまでもない。しかし緊急事態が起こる前に現地に入って、状況を把握し、非常時に動けるよう備えることも必要になってくる。その際現地のNGO'S、その他の組織との協力関係はなくてはならないものである。なぜなら現地の状況を知りつくしているのは彼らに他ならないのだから。もちろん協力関係にある団体・組織の示すニーズも注意深く尊重されなくてはならない。

このようなある程度先を見越した「先行投資」が、緊急時の効果的な活動と、参加するボランティアひとりひとりの身の安全を保障していく。またその際気に留めなくてはならない事は、どのように状況が展開したとしても、救援なり援助を必要としている人々や現地でそういった人々に対し手をさし出している人々の迷惑にならない事だ。

VII. おわりに

ベイルートの「治安維持」を目的にして展開していた国際監視軍を構成していた4か国のうち、イタリア軍はほとんど最後まで反政府勢力の標的にされなかった。'82年のサブラ、シャティーラでの虐殺事件の後、両キャンプでのパレスチナ難民の安全を確保するということがイタリア軍のひとつの任務だったこともあり、もともと現地のパレスチナ人、レバノン人から歓迎されていた。しかし一番大きな理由は、あるレバノン人から聞いたところでは、イタリア政府が難民キャンプ内で移動診療車による医療サービスを実施していたこと、またシャティーラ・キャンプの南にあるイタリア軍本部のテントの野戦病院では民間人も無料で診療していたことだという。

どのような状況であろうと、最悪の境遇の中で呻吟している人々に対する救援活動は、誰からも認められるという真理を含み込んでいる。

南の国々からの資源に依存し経済的発展を遂げた日本に住むひとりひとりにとって、天災であれ人災であれ世界の悲惨に目をつむっていることは、世界市民としての義務に反する。現実を直視し、それを变えるべく行動することはひとつの責任でもある。その行動は単に日本でその因果関係を解明し、異議を申し立てるばかりではなく、今もおれゆく人々に対し直接手を差し伸べることが必要とされている。

日本国憲法は、「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去」することに希望を見出し、「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認」しているが、この崇高な理念をただのお題目に終わらせるか、内実のあるものとして生かしていくかは、主権者である国民ひとりひとりが、草の根民衆の立場でどのように行動を起こしていくかにかかっている。私たちは難民（被災民）がいかなる政治状況下にあっても、人間として生きていく基本的権利が損われている限り、救援活動を展開していく。それは、状況を変革しようとするうねりのなかのひとつの役割を担うことになるだろう。

たけうち・としゆき；1981年5月渡タイ。3ヶ月バンコク事務所、5ヶ月間カオイダン・テクニカルスクール運営補佐、1982年2月より12月までタイ・カンボジア国境教育物資配布プロジェクトに従事。'83年1月の調査を経て、8月から'84年1月までベイルートに駐在。

スラムの未来は子供たちの教育から

奨学金を受ける子供たち——タイ、バンコク

JVCでは1982年からデッグ・スラム奨学金の制度を設け、スラムの子供たちが少しでも多く教育の機会を与えられるよう援助している。(Trial & Error・No25で紹介)この奨学金を受けている子供たちは82年は70名、83年は50名、84年は160名くらいになる予定である。

タイの義務教育は数年前、小学校4年生から6年生までに引き上げられた。今は過渡期なので六三三制が徹底されていないが、それ以前に経済的事情などで、小学校を途中でやめてしまう子供も多い。学用品や制服が買えなかったり、家事やアイスクャンデー売り、くず拾い、ビニール袋洗いなど家計を支えるために働かなければならないからだ。

JVCのクロントイ・チームは学校の先生や他の民間団体、公共団体等からの情報をもとに家庭訪問し、奨学金援助の必要性を見極める。ただし学業の良し悪しは判断の基準とはならない。成績を条件からはずしたのは、今まで十分な教育を受けていないため、

良い成績を期待できないからである。

クロントイ・スラムの住民たちの多くは、最も貧しい地域といわれる東北タイの出身である。土地もなく、手に職もなく、学歴もない彼らがバンコクのスラムに住みつくようになって、できることといえば、スラムの住民を相手にした小商いか、港湾労働者、土木作業員などの肉体労働ぐらいである。その日を暮らすのに精一ぱいで、たくさんの子供たちに十分な教育を受けさせてやる余裕はない。そして子供たちは親の職を継ぐような格好で、貧しさを再生産している。子供たちは自力で貧しさの輪から抜け出るしかない。働きながら夜間の教員養成学校を出たプラティープさんもそのひとりだった。

プラティープさんに続く子供たちが、少しずつスラムを変えていくには気の遠くなるような時間がかかるかもしれない。しかしそれが一番確実な方法であることは事実である。



左上 クロントイの屋根の上

左下 家計の足しに、ビニール袋を洗って廃品回収業者に売る
右 店番をしながら勉強、ヴィチヴィタヤ小学校の生徒



奨学金を受ける子供たち

奨学生に関する報告書には家族構成、家庭環境等が記録されている。悪条件の中でけなげに生きていくとする子供たちに心打たれる。

ガンヤー・ムハメッド。女。12才。1970年12月11日生。住所はバンコク市プラカノン地区^(注)。ヴィチヴィタヤ小学校の5年生である。家族は6人。42才になる母と、それぞれ小学校6年生の15才と13才の兄、小学校2年生になる8才の妹と1年生の弟である。父親は7年前サウジアラビアに出稼ぎに行った時、仕事現場で起きたガス爆発事故が原因で死亡した。母親は心臓病のため働けず、現在は親戚の人に面倒をみてもらっている。子供たちは全員が学校から帰ると家計を支えるため何らかの仕事をしている。ベトナム戦争が終結した1975年以降、米軍基地労働者が失業し中近東への出稼ぎが増えたという。それがやがて農村地帯にも広がった。かなりの借金をして旅費を捻出するため、借金の返済をしたら赤字になることもあるという。しかし現金収入の少ない東北タイ農民の出稼ぎは後をたたない。

マヌッ・レンカムヌッ。男。11才。1972年6月23日生。住所はバンコク市プラカノン地区。ヴィチヴィタヤ小学校5年生。家族は美容師をしている42才の母親と小学校6年生の12才になる兄との3人である。両親は4～5年前に離婚している。家は借家で家賃は1000バーツ（1バーツは約10円）もかかる。二階建てだが約3×7㎡ほどの広さしかない。美容院なので電気代と水道代を200バーツ、月々支払わなければならない。母親の月収は2000バーツほどしかないので、家計の足しにと、朝菓子売りもしている。マヌッには手足の指に奇形があるが、普通の子供たちと同じようにペンを持つことができ、母親の手伝いもする。性格は明るく母親思いでもある。母親はチャイヤプーン県の出身で、物価の高いバンコクを離れ故郷に帰りたいといっており、生活に疲れている様子である。

ニッパー・インターヴォン。女。11才。1972年6月9日生。住所はバンコク市プラカノン地区。ヴィチヴィタヤ小学校3年生。家族は6人。父親は他県に働きに出たまま帰らず、家計は母の廃品回収（1日20バーツ）と17才と14才になる兄が、商人の手伝いや肉体労働などをして支えている。ニッパーの兄弟は小学校4年生で学校を終えているので、母親は彼女を6年生までは行かせたいといっている。家は



デッグ・スラム奨学金を受けている生徒 撮影 武沢保美

鉄道線路沿いのスラムの中にあり、そこに行くには沼地の上に建ち並ぶ家々の間の、狭くて古い板の橋を渡らなければならない。水道設備がないので、水はバケツ1杯につき1パーツで買っている。

スナン・チャンサワッ。女。9才。1974年3月22日生。住所はバンコク市プラカノン地区。ヴィチヴィタヤ小学校2年生。（当初は奨学生の対象を小学校高学年にしていたが、現在は年令枠を広げている。）家族は両親と14才から生後3ヶ月の赤ん坊まで、計9人になる。父親がアイスクリーム売りをして稼ぐ1日70パーツがこの一家の唯一の収入なので、生活は苦しい。

ワサン・スックデー。男。12才。1971年7月4日生。住所はバンコク市フアイコワン地区。ヴィチヴィタヤ小学校6年生。家族は7人。5人姉弟の3人目で、たったひとりの男の子であるワサンは、特にかわいがられているようだ。父親は土木作業員で、日給80パーツの仕事も毎日あるとは限らない。それでも両親は教育の必要性を感じ、彼にはできるだけ高い教育を受けさせてやりたいと思っている。

スパポーン・ポートヤー。女。7才。住所はバンコク市フアイコワン地区。ヴィチヴィタヤ小学校3年生。家族は大工をしている祖父、野菜売りの祖母、102才になる曾祖父との4人である。スパポーンは孤児で生後2ヶ月位の時、近くの駅から拾われてきた。スパポーンは自分でもこのことを知っているが、人には言わないでほしいと何回も祖母に頼んでいるという。やんちゃで活発な彼女は家事を手伝う時もあるが、遊んでしまうこともあるようだ。

注：バンコク各地に点在するスラムの総人口は、推定で70万～80万人に達するといわれる。バンコク市街の東部に位置するプラカノン地区もその一つ。（この地区は、仏教徒の多いタイでは珍しい回教徒の信者が多い。）クロントイ同様、湿地帯にあり決して生活環境は良好とはいえない。



デッグ・スラム奨学金に関する Q & A

- Q** : 学費は義務教育だからかからないはずですが、奨学金はどういうふうに使われるのですか。
- A** : 児童への援助費は、教科書、教材道具、学用品、制服、保健衛生、食費(昼食)に1000バーツ。他に援助者との通信費、写真記録費、事務費に200バーツが使われます。
- Q** : 親が奨学金を使ってしまうという心配はありませんか。
- A** : 学校に直接渡すので、そういう心配はありません。
- Q** : 小学校卒業までが目標だそうですが、それ以上の上級学校に子供たちが進みたいといった時はどうしますか。
- A** : 本来の対象者は小学生だけですが、中学生の奨学生も少しいます。
- Q** : プラティーブ財団奨学金とデッグ・スラム奨学金はどのような違いがありますか。
- A** : プラティーブ財団奨学金はクロントィ・スラムのパタナ共同体小学校の生徒を対象にしていますが、デッグ・スラム奨学金は対象枠をクロントィ・スラムの外にも広げています。東北タイや他のアジア諸国の子供たちも援助したいのですが、今のところはバンコク周辺のスラムに留まっています。なお、プラティーブ財団にはモラロジー研究所がJVCを通じて奨学金を送っています。
- Q** : 援助する額は決まっているのですか。
- A** : 奨学金には(a)一人から個人への援助と、(b)一(デッグ・スラム)基金を経る援助があります。(a)の場合、ひとりにつき1万2000円(1年分)ですが、(b)の場合は一口いくらでも構いません。(a)の場合は、毎年学年末から一ヶ月以内に、学業成績、家庭情況、会計報告を援助して下さった方にお知らせします。



上左 バタナ共同体小学校 撮影 武沢保美
 上右 板きれの通路がどこまでも続く、クロントイ
 中 小学生からみな制服を着る 撮影 武沢保美
 下 バンコクには、400ヶ所以上もスラムがある。

声

アフリカでは毎年500万人の子供たちが餓死しており、さらに500万人が飢餓状態にあるという、デクエアル国連事務総長の発表を読売新聞がとりあげたところ、多くの人達から、"何もできないけれど子供たちのミルク代にしてほしい"と義援金が新聞社に寄せられました。

現地でそのお金を有益に使うには、その地で活動している団体に委託するのが良いだろう、とする新聞社の判断で、現在、ソマリアで農業プロジェクトを行なっている私共の所へ義援金が届けられました。

その後、再び1月15日、24日、「編集手帳」に取りあげられたことによって、間接（新聞社経由）、直接に届けられた義援金は約400万円に達しました。深く感謝しております。ここで義援金と共に寄せられたみなさんのお便りを、ご紹介させていただきます。

「この間先生から、アフリカの人々が食料不足で、大変困っている記事を読んでもらいました。

学級会でなにか少しでも役に立てることはないかと話し合ったところ、募金が一番いいと言うことに決まりました。日ごろ食べる物などに不自由したことのない私たちは、おやつやその他買いたい物を、ちょっとひかえたくらいで、その苦しみを同じにすることはできませんが、卒業もま近にひかえているので、心をこめて、このことに参加しました。少しですが、どうかよろしく願います。」

(久喜市立本町小学校6の4 クラス一同 埼玉)

「幾度となく流産をくり返しながらも必死に笑顔で耐えていた御近所の奥様にやっと男の赤ちゃんが無事産まれた由、元気な泣き声が聞こえてました。

ソーッと願いをたてて祈ってましたので祈願達成のお礼です。アフリカの幼ない兄弟にミルク代の足しして下さい。」(H. M 神奈川)

「アフリカの人達が、食料危機で困っているとききました。新聞にも骨と皮だけになってうずくまっている子供の写真が載っていて、それを見たとき、私達にも何とかできないかと思いました。

そこで、お年玉の一部を送らせていただきます。

少額ですが、兄弟三人、このお金で一人でも多くの人が救えたらと思っています。」

(K. I, H, R, 神奈川)

「私が今、こうしてペンを走らせている間にアフリカでは何人かの子供達の命が、失なわれているのかと思うと同じ人間としてやりきれない気持ちです。

少しでも仲間を救えるなら…と思い、わずかではありますが役立てていただきたいのです。

世の中、よけて通りたくなるような問題があふれていますね。けれど見て見ぬふりをしていたら、いつになっても平和などおとずれないでしょう…。

そう思えば一人一人が人助けの精神で心をつにつにがんばらなくてはなりませんよね…。

自分の生活に浸りすぎて、まわりを見ることを忘れてはならないと思います。これから、ますます生きづらい世の中になるとと思いますが、自分だけでなく周りの苦しんでいる人を助ける心を忘れぬよう生きようと思っています。」(Y. N 群馬県)

「ぼくは、小学三年生です。きょう学校でアフリカのおともだちのことをききました。きゅうしょくはのこさずぜんぶ食べます。お年玉の一部を弟とおかあさんにも、てつだってもらいましたのでおくります。」(T. M. 福岡県)

「平和な日本では考えられない事です。私も人生の折り近し点を過ぎました。この辺で、米つぶほどのしあわせを他の方に向ける余裕（気持ち）も出来ました。親子四人健康で平和に生活しております。

ローン、教育費と費用のかさむ事の多い時期ですが、貧者の一灯ですでお役に立てて頂きたいと思っています。今後アルバイトのある限り、わずかですがお送りさせていただきます。」(O. M. 東京)

「五日付の編集手帳をいつものように最初に読んで行くうちに胸がしめつけられる思いがし、何と私達は恵まれた生活をしていて、それでも不満はあれも

声

これもときりがなく情けなく思いました。これはお年玉として日本から子供達に送られて来たもので、アフリカの人達を少しでも救ってあげられるなら、こんなに素晴らしいお年玉はありません。」

(K. Y. ニューヨーク)

「アフリカへ義援金を送る人達の優しい気持ちに触れ、今のせちがらい世の中で、人間として忘れてはならない“心”を思い出させてもらったようです。

職場で声をかけたら、多くの人が参加してくれました。みんな優しい人たちです。」

(A. M 他17名 群馬県)

「我が家は昨年暮、主人の会社が倒産せざるをえなくなり、大勢の方々に沢山のご迷惑をおかけしましたのに思いもかけない方々から、数え切れない程多くのお情けをいただき、無事新年を迎えさせていただく事が出来ました。

ご厄介になりました方々に近い将来、きっとご恩返しさせていただこうと家族で、頑張らせていただいておりますが、みんなで少しずつのお金を出し合い、感謝の気持ちを表わせてもらう事に致しました。

アフリカは、もちろんの事ですが、世界の人々の幸せを心からお祈りさせていただいております。」

(匿名、新潟県)

「私は七十六才の老婆でございます、年金生活を致しております独り暮らしの老人でございます。

アフリカの飢餓は一層深刻化しているという記事を読みまして、私は深く感動致しました。何とか多少なりともお手伝いしたいと力んで見ましても年金生活者は日々ぎりぎりの状態で、どうする事も出来ません。雀の涙、焼け石に水程の金額で誠にお恥かしく、何の足しにもならない事とは十々承知致しながらも、じっとして居られない気持ちにて少々のお手伝いをさせていただきます。

如何に雀の涙程のお手伝いとは申せ、全国の小さな愛が結集致しましたならば必ずや大きな力を産み

出す事と存じます。○(マル)□(シカク)と申しましても、少しなりとも欠けた所が生じましたならば完全な○(マル)□(シカク)とは申されません。

その欠けました部分の更に又、基の一部をお手伝いさせて頂きたいと存じます。』(N. U. 群馬県)

'84年2月25日、東京、高田馬場山手 YMCA に於て、JVC、現地駐在員柴田久史より「ソマリアにおける難民援助農業プロジェクト」の報告会がありました。

その時、会場に来ていただいた方々の声です。

「彼ら難民が何を考えているのか、何を欲しているのかわからないとのことですが、ここで実際問題となっているのは何なのでしょう。難民問題というより貧困の問題の方が、大きいのではないのでしょうか。アフリカの貧困のことを考えたら、ソマリアだけではなく、ほとんどの国で問題となっているのではないのでしょうか。これに対してどう対処していくべきなのだろうか。援助だけしてれば、これは解決されるものではなく長い年月をかけても自分たちだけで生きていけるようにすることも大切なのではないだろうか。』(H. T. 学生)

「問題視して援助しようという気がつよいのは、現地の人々をこわしてしまう気がします。だからといって、援助をやめてしまうのも心にひっかかりますし、たいへんむずかしいかねあいだと思います。」

(K. K. 学生)

「全く、あらゆる点で異なる民族に接し、理解しようにもかなり困難が付きまわっていること、政治的にも、翻弄されやすい地域であることがわかりました。援助も今までとは異なる段階にすすみ、援助のあり方、一人間というもののとらえ方、これから彼らの歴史にもある程度かかわっていく援助のあり方について自分自身への問題提起となった。」

(K. U. 会社員)

「アフリカは距離的にも文化的にも、私たちからはあまりに遠く、想像もできない土地である。大国の利益追求政策のために罪もない人々が生活の場を追われ、困っている、非常にはらだたしい。」

(A. S. 会社員)

JVCプロジェクト

1984年2月29日現在

- シンガポールとの関係再び — 以前タイのスラム・国境などで活動していたニール・リーが、2月から、UNHCRの管理運営担当者として、シンガポールにあるベトナム難民ホーキンスロードキャンプへ。

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民)	●技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。各3ヶ月、学生数約500名・基本的な技能訓練を通じて、本国帰還あるいは第三国定住していくカンボジア難民(15才以上)の自立を助ける。	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会 レフュジエ・イン ターナショナル	ソムウェック・ルチャイシット 山西映子 トンディー・ソムカネ 嶋 紀晶, 松本一仁 稲垣三千穂
	●コントラクション 給水=近くのダムから既存の配管までの4.5kmに対して給水配管する。 電気=夜間の安全のためにキャンプ外周に防犯灯を設置する。	UNHCR	スラボン・パドウンキアティ 永井聖子 バンチャ・ケオルディ パニット・ポティピ 中藤 昭
タイ・カンボジア 国 境 (カンボジア 難民)	●レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。 ICRC(赤十字国際委員会)や、海外の医療団体との協力は順調に進行中で、2月からは、タブラヤ郡病院の農村巡回診療のプログラムに参加。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院	金子一弘, 林 達雄 サルミエント・ロドリゴ クリアंकライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン
	●ノンチャン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の栄養失調児、病人、妊産婦、乳幼児とその母親を対象とした補助食供給と栄養教育。 ノンチャン村へは、長時間留まることができないので調理はカオイダンで行なわれ、「ドライ・バック」(水分の少ない食物)として一週間分が現場へ運ばれる。	WFP/UNBRO	大野直樹(療養のため 一時帰国中) イサラサク・ジャロンウォン ヤオワラック・スクピティ 荻野美智子 スニー・サカオラット トンチャイ・クラタルムボン ピアラット・ヴィパスラ モントン
タイ 農村	●給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り、貯水タンクづくり、及び改良型ポンプの設置。	モラロジーMIRC NTV	木村信夫, 佐藤正喜 ブンナム・チャルンプリトゥム カモン・ミンムアン
バナニコム (第三国定住持ち の難民一時収容施 設)	●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション。	天理教 千葉県	佐藤和美, 石丸 寧 鈴木絵里子, 森本陽子 スティープン・ホフマン ティアン・バントゥー
ク ロ ン ト イ (バンコク市内の スラム)	●スラム改善プロジェクト 奨学金援助: スラム児童のための学費援助 図 書 館: 児童, 成人のための図書館 建 材 提 供: スラム立退き者への物資援助	モラロジーMIRC NTV 庭野平和財団 今井記念基金 JOFIC 一般寄付	タウィチャイ・タームクナノン ソンボン・ブンヤバンチャ 伊藤真理子, 坂場由美子

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カンボジア タケオ	●井戸掘り 地域の診療所，東部・北部農村での井戸掘り。 (機械搬入中)	OXFAM モロロー-MIRC LWS	簗田健一(待機中)
ソマリア (東アフリカ)	●農業プロジェクト マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	UNHCR 一般寄付	柴田久史，税田芳三 山賀望幸，高橋一馬
レバノン (中近東)	●医療ボランティア派遣プロジェクト及び緊急物資援助 レバノンでの被災民(レバノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助および物資救援。(毛布などの物資援助は，第1回が昨年10月28日，第2回が今年2月4日空路輸送により行われた。)	レフュジー・インターナショナル 一般寄付 (輸送協力:JAL エール・フランス)	竹内俊之 (一時帰国中。プロジェクトは，時期をみて続行の予定。)
人材派遣・養成プロジェクト			
シンガポール	●UNHCR-ホーキンスロード・ベトナム難民キャンプの管理・運営。	日本YMCA同盟 アジアキリスト 教会議	ニール・リー
ニカラグア	●ICM-移民受け入れ業務 (ICM*とJVCの協約によるボランティア・トレーニング・プログラム。)	ICM, JVC	福村州馬
日本国内	●日本語家庭教師：定住難民の日本語学習援助 バザー，ハンディクラフト販売 *カオイダン「国境をこえた人々」上映運動 *スタディー・ツアー企画実施 第2回を2月17日から27日までの日程で実施した。参加者6名。	善林寺 小山工業所 西本願寺(高岡 寺青) 一般寄付	植田博 他約30名 東田鶴子 他約20名 鴫田三芳他 熊岡路矢他
東京事務所 (本部)	涉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計 総務，情報収集および広報等 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行	全国社会福祉協 議会 YMCA 妙心寺 杉並ライオンズ クラブ 一般寄付	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢，田島 誠 本橋 栄，鴫田三芳 佐々木志保 他約20名
バンコク事務所 (タイ)	涉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計， 総務，情報収集および広報，バザー等 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行		高塚政生(バンコク 事務所長) 深津高子，石橋節子 ポンピモン・チャイブーン 森本喜久男，勝俣江美 カセム・スクタコ 他約10名
<p>*ICM (Intergovernmental Committee for Migration) …国際移民委員会。 移民問題の政府間委員会。1952年に設立され本部はジュネーブにある。'83年1月現在，29ヶ国の政府が加盟しており，日本はオブザーバー14ヶ国のひとつ。難民が第3国に定住する際，あるいは移民が出・入国する際に，当該国の委託を受けて，移送手段の手配を始めとする諸手続きを行なうことが，ICMの主な活動。</p> <p>JVCは，今年の1月18日，ICMと合意書を取り交わし，ICMへ人材を6か月間派遣することになった。難民や移民に対する実際の活動を通じて人道的・政治的理解を深めるとともに，自己の能力を高めることが研修の目的。</p>			

JVCとは

Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア、ソマリア、レバノンで活動している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所は、以上の各現場と連携して、情報、人材、資金を最も有効な形で、活動に結びつける努力をしています。



発行所 日本国際ボランティアセンター
JVC東京事務所
〒166 東京都杉並区阿佐谷南
1-1-5 安田ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

バンコク事務所 Japan International Volunteer Center
67 South Sathorn Road Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

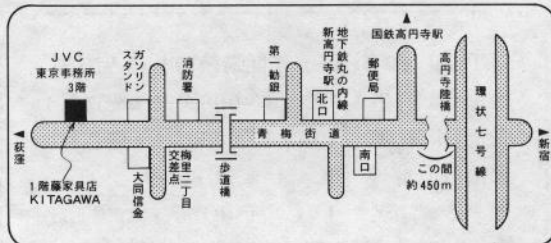
昭和59年3月20日発行
毎月20日発行

発行人 星野 昌子
編集人 本橋 栄

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

『レバノン難民救援募金』 緊急アピール

JVCでは、レバノン緊急事態にこたえ、これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため、緊急アピールを行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。緊急アピールに、一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。



定価 送料共 200円